

コラム「新型コロナウイルスのアホ（その4）」

神沼遼太郎

新型コロナウイルス感染症はまだまだ収まる気配がない。欧米では第3派とも言われる再流行に襲われ、メトロポリタン歌劇場やニューヨーク・フィルが今シーズンの全公演を中止とか、ミラノ・スカラ座やポリシヨイ劇場で集団感染とか、暗い話題しかはいつてこない。

我が国の感染者数も減りそうでなかなか減らない。個々人の感染防止策はそれなりに徹底されている一方で、GoTo キャンペーン始め経済を立て直すための政策で人の移動が活発化しているのだから、この状況は想定内とも言える。

演奏会はホールの定員の半分程度を入れた開催が広がってきており、今のところクラシックの演奏会場からクラスターが発生したという話は聞かない。飛沫拡散がより心配されるオペラ公演も徐々に再開の動きが出てきた。井上道義総監督・野田秀樹演出の「フィガロの結婚～庭師は見た！～」のように初演時と同じ「超密舞台」をそのまま再演した例もある。

そして、9月25日の第43回新型コロナウイルス感染症対策本部では、イベント開催における人数制限が緩和され、クラシックの演奏会などは100%収容も可能とされた。

先の「フィガロ」の東京芸術劇場における公演もこれを見越したかのように全席販売、久々に前後左右にお客さんがいる緊張感を味わった。

もちろん、全てのホールや主催者が、これで一気にチケット販売数を大幅に増やすわけにはいかないだろうが、一歩ずつ前進しているようには見える。

その一方で、再開に向けてまだ見通しが立たない公演もある。とにかく飛沫が飛ぶ合唱や、演奏者と聴衆とがやり取りしながら進めるワークショップ型のもは難しい。

前者については、東京混声合唱団がハミング歌唱による新作を3人の作曲家に委嘱し、譜面と演奏の動画を公開している。誰でも歌えるように書かれた上田真樹と信長貴富に対し、新しい世界を切り開こうとする池辺晋一郎。正に窮余の一策という感があるが、何とかしたいという意気込みは十分伝わってくる。

後者についても、最近意欲的な試みに立ち会うことができた。10月16日、府中の森芸術劇場ウィーンホールで行われた「音楽で脳トレ！！Music in Education オンラインワークショップ」である。NPOらしいに音楽プロジェクト事務局長で、ニューヨークフィルの教育部門と協働で「ティーチング・アーティスト」と呼ばれる音楽教育の専門家を我が国に紹介するなど、先進的なワークショップの実践や人材育成で活躍する砂田和道氏が総合プロデュースし、東京シンフォニエッタのヴァイオリン奏者梅原真希子さん、藝大フィルハーモニア管弦楽団の植村理一さんなど、5人の奏者による対話型鑑賞プログラムである。

と言っても、ホールは無観客である。聴衆は事前に電子メールで申し込み、受付確認メールで送られてくる情報に従ってホールの演奏をPCやスマホで視聴する。通常のオンライン配信と異なるのは、公演開始前に性別、年齢層など参加者の属性に関する簡単なアンケートに答え、演奏会の途中でも様々な質問が投げかけられることである。

プログラムはナビゲーターを務める砂田氏のプレトークから始まる。プログラムの狙いや進め方についての説明があり、演奏の前にはどこに注目して聴くか、演奏の後には感じたこと、気付いたことを問われる。聴衆はただ演奏を受け身で聴くのではなく、リズム、メロディ、音程など自分なりの注目点や狙いを定めて主体的にプログラムに関わることを求められる。全ての演奏が終わった後には、自由に感想を送ることもできる。

この日のプログラムは全体で1時間ほどだったが、これで終わりではない。事前に収録した別の曲が10月24日～27日にかけてオンデマンドで配信された。10分程度の動画だが、ここでもただ視聴するだけでなくアンケートに回答することが求められる。

なぜこんなややこしいことをするのかと言うと、後のオンデマンド配信には16日のライブ配信に参加した人もしなかった人も聴けるので、双方の回答を比較できる。すると、ワークショップにどのような効果があったかを評価できるはずである。これがこのプログラムの最終的な目標ということになる。

こう書くと何だか科学実験の場に立ち会うようなイメージになるが、実際に参加してみるとそんな堅苦しいものでは全くない。まず5人の奏者たち（ヴァイオリン、ヴィオラ、コントラバス、ホルン、ファゴット）が、もともと弦楽合奏やピアノの曲を色彩豊かなアンサンブルに変身させていることに驚く。演奏として文句なしに楽しめるのである。

そこに、多少ぎこちなさを残しながらも、砂田氏と奏者たちの間で対話があり、彼らから視聴者への問いかけがあり、視聴者の回答に対して彼らも反応する。つまり、言葉の上でも相当濃密なコミュニケーションが成り立っている。「音楽で脳トレ!!」のタイトルそのままに、視聴者は彼らの解説や質問を脳で咀嚼しながら音楽を聴くことになる。

さらに、2回とも工夫を凝らしたカメラワークで、奏者たちの演奏ぶりや表情が観る者に迫ってくる。生配信でもオンデマンド配信でも、会場へ吸い込まれていくようなライブ感が半端ない。砂田氏と演奏者たちを多くのスタッフが支えていることで、このような充実したプログラムが成り立っているのである。

今回は限られた公演時間なので、ワークショップとして取り上げる内容はかなり欲張ったものになった。今後例えばリズム、メロディ、ハーモニー、音色など、いくつかのテーマごとにワークショップのシリーズを組めば、参加者は主体的に音楽へアプローチし、演奏から深い学びや気づきを得ることができるに違いない。クラシックの演奏会の新しいスタイルを切り開く可能性を感じさせる体験だった。

今後このような対話型鑑賞プログラムがもっと広がることを期待するが、そのためには音楽ホール側に大きな変革を迫らねばならない。それは、ホール内のネット環境である。これまでは携帯電話の着信音などを防ぐために、いかに通信を遮断するかに力を注いできたホールが、全く逆方向の対応を求められるのである。

ちなみに、今回のプログラムを実現させるため、主催者はわざわざホール内にネット回線を引き込む工事をして、wifiの器具も持ち込んだのだそうだ。

現状ではこうするしかなかったのだろう。しかし、今後通常の演奏会でも、収益確保や新たな聴衆開拓のために、聴衆を入れながらもオンライン配信とハイブリッドで実施するスタイルが珍しくなりつつある。このような演奏者側の動きをホール側はどう見ているのだろうか？私は、近いうちにネット環境の有無が音楽ホールや劇場の死活問題になると見ているが、大袈裟やろか？

【出典】 https://www.gentosha-book.com/creators/sakka_page/kaminuma/

「コラム『新型コロナウイルスのアホ その4』」, 「表現者の肖像 クラシックアホラシー (文庫版) No. 35 神沼遼太郎」, 幻冬舎ルネッサンス新社

【神沼遼太郎プロフィール】

1962年大阪生れ。1990～98年にかけて『音楽現代』（芸術現代社）に「ニュー・ヨーク便り」などを断続的に連載、2006～07年にかけて『クラシック・ジャーナル』（アルファベータ社）に「知られざるアメリカ音楽発展史 - それは1940年代から始まった」を連載。その他『WAVE31 カルロス・クライバー』『グランド・オペラ』『CDジャーナル』『マリ・クレール』誌等に執筆歴あり。